

多摩棕櫚亭協会活動報告会・研修会についての報告とご列席いただいた方へのお礼

社会福祉法人 多摩棕櫚亭協会

平成 28 年 7 月 23 日、平成 27 年度多摩棕櫚亭協会の事業活動報告会及び研修会を行ないました。当日は利用者・ご家族・行政機関・福祉関係者など 70 名を越える参加者で、ピアスの 2 階は熱気でいっぱいにあふれました。



第一部活動報告会は 1 時にスタートしました。ご参加いただいた皆さんの顔を拝見する中で、29 年を迎えた棕櫚亭の活動が、地域の中で確実に根を張っているのだという強い感慨もわきました。

特に関係機関の方からは「高齢者見守り」や「こどもの貧困」に対する棕櫚亭の活動もご紹介いただき、「ピアスの弁当事業が地域の福祉活動の一端を担っていることに感謝している」とコメントもいただきました。

限られた 1 時間で、本部やピアスなど各事業をもれなくできるだけ解りやすく伝えたいという思いでスライドやビデオを使用しましたが、撮影に協力してくれたメンバーの方の思いは参加者に伝わったようで、アンケート結果としてお褒めの意見を沢山いただきました。



繰り返しになりますが、報告会で私たちが伝えたかったメッセージは「精神科病棟の開放を訴え実践してきた世代から、次にバトンタッチがなされていくなかで棕櫚亭らしさを失うことなく、新たな課題もしっかりと受け止めたい。そしてこれからもメンバーの社会参加への機会を拡大したり、幸せ実現を支援したい」ということです。

そのためには、「これまでの実践の上に、時代に合わせた知見を重ねながら、職員一人ひとりが力をつけていきたい」という発言をさせていただくよい機会となりました。



第二部の講演会では、ピアスのCESプログラムや作業体験プログラムの講師で、多摩総合精神保健福祉センターなどでも講師をされている中村干城氏に、「発達障害者のコミュニティ支援の必要性」というテーマで講演していただきました。

「発達障害者を支援する上で健康的なコミュニティの存在は欠かせない」という言葉から始まり、発達障害の概要や制度や発達障害を取り巻く現状の変化、支援の課題、支援のあり方など幅広くお話しいただき、あっという間の2時間でした。

いくつかキーワードだけご紹介すると、『発達障害のある人の支援の現状は、切れ目のある支援になってしまっている』『障害のある人の考え方、価値観や世界観を、支援する側が理解する必要がある』『障害に着目するのではなく「その人らしさ」を伸ばしていく』『グループで受け入れられる体験をし、自信をつける必要がある』などでした。

さらに『障害のある人が環境に適応するのではなく、障害のある人と環境が互いに適合するようにすべき』『生活支援 5年先を見越して支援をデザインできているか』なども提言されていました。

どれも大切な事ですが、なかなか取り組みきれていない事ばかりです。



それから参加者からもたくさんの質問やアンケート、ご意見をいただくことができました。ある当事者の方は『難しい話だったけど、自分にも当てはまるところがたくさんあると感じた』など、うれしい感想でもありました。

会の報告の最後に、「報告会」「研修会」にご参加・協力いただいた皆さんには重ねて、この場でお礼申し上げます。来年執り行います棕櫚亭30周年記念式にもぜひご参加ください。